令和２（２０２０）年度後期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
―PDCA サイクルに向けて―

教養教育院総務委員会委員長
南川慶二

目的

大学教育に関しては，教育目的・目標の明確化やその到達度，さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために, 学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第３期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，双方向の PDCA サイクルを確立し，徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

令和元年度と同様に，毎回すべての授業科目群を対象として期末に実施することとした。新型コロナウイルス感染防止のため前期は遠隔（オンライン）授業が推奨され，一部の対面授業と遠隔授業が混在した状況であった。その後，9 月下旬には BCP レベル 1 となったことから，後期の開始時には多くの授業で対面授業が可能となった。しかし，10 月下旬に学内で複数の感染者が出たことから，遠隔授業限定または推奨の期間が BCP レベルの変動に応じて設定された。レベル 0 になるまで対面授業を実施する場合には講義室定員の 50%を上限としたため，受講者の多い授業ではすべて遠隔授業で実施することとなった。今回のアンケートは令和 3 年 1 月 14 日～2 月 10 日に実施した。教員に対しては，授業実施報告書の提出（令和 3 年 3 月末まで）として実施した。通常の項目に加え，遠隔授業で良かった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

結果と分析

１）回収率

令和２年度後期の期末アンケート回収率の科目群ごとの平均値は 44～65%であった。全体的に，例年よりも低かった前期(62～72%)よりもさらに大きく低下した。毎年後期は前期よりも回収率が低下する傾向にあるが，今年度は特にその傾向が顕著であった。各科目群の回収率の違いも大きく，一般教養(44%), グローバル(49%), イノベーション(62%), 基礎基盤(53%), 汎用的技能(65%), 地域科学(48%), 医療基盤(50%)，外国語(50%)であった。個々の授業による違いが大きいことは例年と同様であった。前期の段階で回収率が例年より低かった原因をオンライン授業によるアンケートの説明不足が原因の一つと考えたが，効果的な対策を見出すことができず，さらに低下するという結果になった。オンライン授業で回収率を向上するためには，全体的な周知に加えて，各授業担当教員からも学生にアンケートの意図を説明するように協力を求めることなども検討する必要があると思われる。各授業間での違いが大きいこと，同時期に実施している教員へのアンケートの回収率も低いことを考慮すると，授業評価アンケートを積極的に活用する教員が少ないことが推測され，アンケートの結果をより効果的にフィードバックする方策が必要と考えられる。

２）受講環境について

令和 2 年度前期は過去に例のない遠隔授業主体となり，自宅で受講する学生が急増したことから，アンケートの項目に，遠隔授業で良かった点と不都合があった点を追加した。後期になっても遠隔授業が多数実施される状況が続いたため，前期と同じ項目で継続して調査した。対面授業も一部実施されたことから，時間割の都合で遠隔授業を学内で受講するケースも増加し，受講環境については前期に引き続き多様な意見が見られた。

自宅で遠隔授業を受ける場合の利点として挙げられているのは，ほとんど前期と同様の内容であった。「感染の不安がなかった」「通学・キャンパス間移動が不要で時間の余裕がある」「集中できる」「声を出すことができる」「自分の PC で見るので資料や映像が見やすい」，オンデマンド形式では「何度も繰り返して視聴できる」「自分のペースで進めることができる」などである。また，「内容を調べながら受講できる」など，積極的に学修に役立てている例も多く見られた。前期のアンケートではオンライン授業を黙々と受講して一人で孤独に課題に取り組む学生の様子が感じられるコメントもあったが，後期にはオンライン形式の機能を活用して学生同士のコミュニケーションを充実させる例も増加している。「ブレイクアウトルームを使って話し合いを行うことができた」など，オンラインでグループワークやアクティブラーニングを行うことについて特に支障がないことが報告されている。教員とのコミュニケーションに関しては，「対面授業に比べて質問しやすい」という利点も示されている。100 人を超える大人数講義において，「対面では集中して取り組めなかったと思う。大人数なら圧倒的に遠隔が良い」という意見が，オンライン形式がわずか 1 年足らずの間に定着しつつあること及びその利点を学生が認識していることを示している。

遠隔授業による受講環境の不都合な点として，前期に少し見られた「パソコンの使い方がわからない」などのコメントはほとんど見られず，取り扱う機器に慣れている様子が感じられた。その一方で，自宅・学内ともにインターネット環境については不具合の報告が前期と同様に多く見られた。写真や動画などの映像資料を多用する授業も多いためか，通信の不具合による画像や音声の乱れについての指摘が目立つ。出欠確認の時に音声が途切れて欠席扱いになったかもしれないという不安の声も散見される。また，語学では発音が重要であるため，音声の不安定さについての指摘が非常に多かった。「発音が聞き取れない」「自分の声が先生に聞こえているか不安」などの意見である。特に大学内で受講している学生から Wi-Fi の接続不良が指摘されている例が多々見られるため，設備の充実は引き続き重要な課題と考えられる。大学内で受講する学生は自宅のインターネット環境に不備がある場合よりも，前後に対面授業がある場合が多い。次の授業に間に合わせるために課題を急いで仕上げたというコメントの例もあり，全て遠隔の場合に比べて BCP レベルが下がって対面授業が混在する時間割になる場合を想定した対処についても検討が必要と思われる。

３）教員の授業に対する取り組みについて

各教員の授業内容や方法等について，自由記述のコメントから代表的な意見を例示する。良かった点として「写真や動画が豊富に使われていた」「授業スライドを配付してもらえた」などの資料の工夫は対面授業の場合と同様に多く見られた。また，「出席代わりのアンケートの内容を次の授業で反映してくれる時があった」「他の学生がどのようなレポートを書いているか見ることができた」など，学生の提出物へのフィードバックを評価する意見が見られた。これとは逆に，良くなかった例として，「他の受講者の情報を全く知る機会がなかったことで，自分の学習が他の人と比べてどのようであるかを確認することが出来なかったので，時々には対面があってほしかった」「採点の基準を教えてもらいた

かった」「毎回提出するレポートの講評がないから不安になった」などの意見があり，教員と学生や学生同士のコミュニケーションが不足しがちであることが推測される。

オンデマンド形式の授業で改善してほしい点の一例に，次のような意見があった。「講義動画の投稿が遅れることが多々あり，大変迷惑であった。先生としては，動画をいつ見ても構わないしレポート提出までの期間はきちんととっているから良いだろうという方針であったが，講義動画の投稿はもう少しきちんとしてほしい。」というものである。教員が時間の捻出に苦労しながら動画を作成している様子が窺われるが，過密な時間割に縛られる学生も多いため，単に時間の余裕を設けるだけでは不十分で，本来の時間割を意識しておく必要があることが示唆される。

語学の授業では少人数クラス編成となるため，同じ学科・コースで異なるクラス間の授業実施方法や成績評価基準が異なる場合がある。そのことを指摘する意見が多数見られた。他言語クラス間での難易度の差に加え，同じ言語のクラス間にも難易度の差があるとの指摘もあるため，担当者間での情報共有や調整などが必要なケースもあると思われる。また，オンライン授業を大学内で受講していると声を出せない場合が多く，発音練習などで発言を要求されても対応できない，チャットで知らせても見てくれないので欠席扱いになったとの指摘があった。そのほか，「黒板が使えないため，文字の書き順などを覚えることは少し不自由であった」という意見も語学特有の問題点と思われる。

４）学生の授業に対する意識

遠隔授業が一般化して利点と欠点が明らかになってきたこともあり，学生からは感染対策のため遠隔授業を継続してほしいという声が多い一方で対面授業を望む意見もあり，受講者の考えが異なる場合も多い。「対面でやっても遠隔でやってもあまり差がない気がするので，遠隔でやってもいいのではないか」というコメントに代表されるように，教育効果が同じであれば遠隔授業の方がよいという意見が多数派のようである。対面授業を望む意見としては，「語学なのに誰とも話さず，先生の顔もわからないまま終わってしまったのは少し残念でした。」「オンデマンドの遠隔授業だと教員の授業の手抜き感があります。90 分の授業なのに 90 分もかからずに課題が終わってしまいます。」などがあった。「遠隔授業と対面授業を選ぶことができたのが良かった」という意見に現れているように，このような考えの多様性を考慮して遠隔授業と対面授業のハイブリッド形式を選択する教員も少しずつ増えているようである。

総括

本年度後期は前期に続いて遠隔授業が多数行われた一方で，BCP レベルの変化に応じて対面授業も一部で復活した。前期開始から試行錯誤期間を経て，わずか 1 年足らずの間に遠隔授業がごく普通に実施される状況になり，結果的に多様な学修環境が生じてそれぞれの利点と欠点が急速に明らかになりつつある。学生のアンケート記述の端々から，教員の臨機応変な対応や授業実施方法の工夫が読み取れる。一方，このように大きく変化した状況への対応に教員も学生も苦労している様子も見られる。特に教員と学生及び学生同士のコミュニケーションが不足しがちな状況を改善する必要がある。今後も引き続きアンケート等を活用して，改善のサイクルを進めていくことが重要である。

提言

遠隔授業の利点と欠点を把握した上で，状況に応じた対策とアフターコロナに向けた授業実施方法の再検討が望まれる。具体的には以下の点を考慮する必要があると思われる。

1. 大人数の講義では遠隔授業の利点が多く示されており，アフターコロナでも継続することが妥当と考えられる。ただし，コミュニケーション不足等の問題点もあるため，クラス規模で一律に決めるのではなく，授業の目的や内容に応じて部分的に取り入れるなど，柔軟に考える必要がある。
2. オンラインコンテンツの充実により，反転授業を容易に実施できるようになった。アフターコロナにおいて対面授業主体に戻った場合，コンテンツを活用した多様な授業設計が望まれる。
3. 対面授業と遠隔授業が混在する時間割の問題点が多数指摘されているため，対策が必要である。学内で遠隔授業を受講するためのスペースや Wi-Fi の充実などの物理的環境を整えるとともに，例えば曜日によって対面または遠隔の日を設定するなど，時間割そのものを見直すことも含めて考えるべきであると思われる。
4. 遠隔授業を実施する場合には，ポータル (学生からの入口) を明確にする必要がある。各授業への入口が異なると学生が混乱する恐れがあるため，可能な限り同一のポータルを利用できるように統一することが望ましい。